

墓に残った「亜麻布」

聖書の話によると、日曜日の朝早くイエスは復活し、墓の中に「亜麻布」が残った。

ルカもヨハネもその「亜麻布」に言及している。ルカ24.12の文はこうなっている。

「ペトロは墓に走って行き、身をかがめて中をのぞいたが、亜麻布のほかには何も見えなかった。そこで、この出来事に驚いて家に帰ってきた」

ヨハネ20.1～10の方は詳しい。日曜日の朝早くマグダラのマリアは墓に来て、遺体がないことに気づいてペトロとヨハネに知らせた。二人は墓に走った。その『新共同訳聖書』の訳文を聞いてください。

「ペトロともう一人の弟子は、外に出て墓へ行った。二人は一緒に走ったが、もう一人の弟子のほうがペトロより速く走って、先に墓に着いた。身をかがめて中をのぞくと、亜麻布が置いてあった。しかし、彼は中には入らなかった。続いて、シモン・ペトロも着いた。彼は墓に入り、亜麻布が置いてあるのを見た。イエスの頭を包んでいた覆いは、亜麻布と同じ所には置いてなく、離れた所に丸めてあった。それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた。イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。それから、この弟子たちは家に帰って行った」

このとおり、「亜麻布が置いてある」また、「頭を包んでいた覆いは亜麻布と同じ所には置いてなく、離れた所に丸めてあった」と書いてある。しかし、なぜ、このことを強調する必要があったのであろうか。だれ、何のために覆いを「離れた所に丸めた」のであろうか。なぜ「それを見て信じた」のか。これだけで信じる理由があったのであろうか。むしろ、盗まれたと考えるのは当然だったのではないか。ヨハネのこの文章は、このままではおかしく思われる。そこで、ここ数十年、翻訳に問題があると指摘された。

ギリシア語の原文を読んでもみると、煩わしい表現がある。「亜麻布がKeimenaであった」と言う。意味は、「横たわっていた・伏していた」となる。また、イエスの頭の上にあった覆いは亜麻布と違って「Ou Keimenonであった」と。ギリシア語の ou は英語の not に当たる。「伏していなかった」という意味となるが、上に引用文には、「亜麻布が置いてあった」、「覆いは、亜麻布と同じ所には置いてなかった」となっている。つまり、ギリシア語の「KEIMAI = 横たわる、伏す」という動詞と「EIMI = ある、である」を同じ意味にしている。これでは原文の意味は十分に伝わらないのではないか。なお、イエスの頭の上にあった覆いに関する訳文も同様である。少し専門的になるが、そのことをおゆるください。

原文にはこう書いてある。

「Ou meta ton otonion keimenon, alla koris, entetuligmenon eis ena topon」

Ou meta ton otonion keimenon = 亜麻布と一緒に伏していなかった。

alla koris = 別に、かえって。

entetuligmenon = 丸められていた、畳んであった。

eis ena topon = 同じ一つの場所に。

つまり、

「亜麻布と一緒に伏していたのではない。かえって、元と同じ場所に丸めてあった、あるいは畳んであった」

と言っている。明らかに訳文と意味は違うのである。では、ヨハネは、何を言いたかったのであろうか。

おそらく、次の意味であろう。イエスの遺体が包まれていた時、亜麻布はふくらんでいた。しかし、中身が抜けた後、風船のようにしぼんでしまった。すなわち「伏していた」。イエスは、布の位置を変えないうで、抜けだしたのであった。弟子たちに現れた時も抵抗なしで部屋に入ったのではないか。だが、その頭の上にあった汗ふき布は、違う状態であった。「ou Keimenon = 伏していなかった、すなわち、しぼんでいなかった」。かえって、「元と同じ所に丸められたまま・畳んだままであった」と言う。

おそらく、汗ふき布はイエスの葬りを準備する時にだけ使われ、その後、畳んで別な場所に置かれたのであろう。もし、オヴィエドの「スダリオ」がそれであるとしたら、十字架から降ろされたイエスのご遺体を墓へ運ぶ途中、口と鼻から垂れる血を止めるために頭の上に布が被され、墓に着いてからはそれを畳んで別に置かれたのであろう。それは、復活の後、元と同じ場所に残っていたのであろう。

そうであれば、ヨハネが言う「これを見て信じた」という言葉が分かる。もし、遺体が盗まれていたのであれば、亜麻布の状態は乱れていたはずである。私が思うには、一部の聖書学者が言うとおり、この解釈は原文に忠実である。日本では、フランシスコ会聖書研究所訳の聖書はこれを受け入れている。

「そこで、ペトロともう一人の弟子は、出かけて墓に向かった。二人は一緒に走って行ったが、もう一人の弟子の方がペトロより速く走って、先に墓に着いた。そして、身をかがめてのぞき込むと、亜麻布が平らになっているのが見えた。しかし、中には入らなかった。後に続いてシモン・ペトロも来て、墓の中に入りよく見ると、亜麻布が平らになっており、イエスの頭の上にあった手拭いが、亜麻布と一緒に平らにはなっておらず、元の所に巻いたままになっていた。次いで、先に墓に着いたもう一人の弟子も中に入り、見て信じた。二人は、イエスが死者の中から必ず復活するという聖書の言葉を、まだ悟っていなかったのである。」
(サンパウロ出版聖書による)。

墓の中に残った亜麻布は、弟子たちにとって復活の「Silent witness = 無言の証人」となっていわけである。